

保存活用計画書

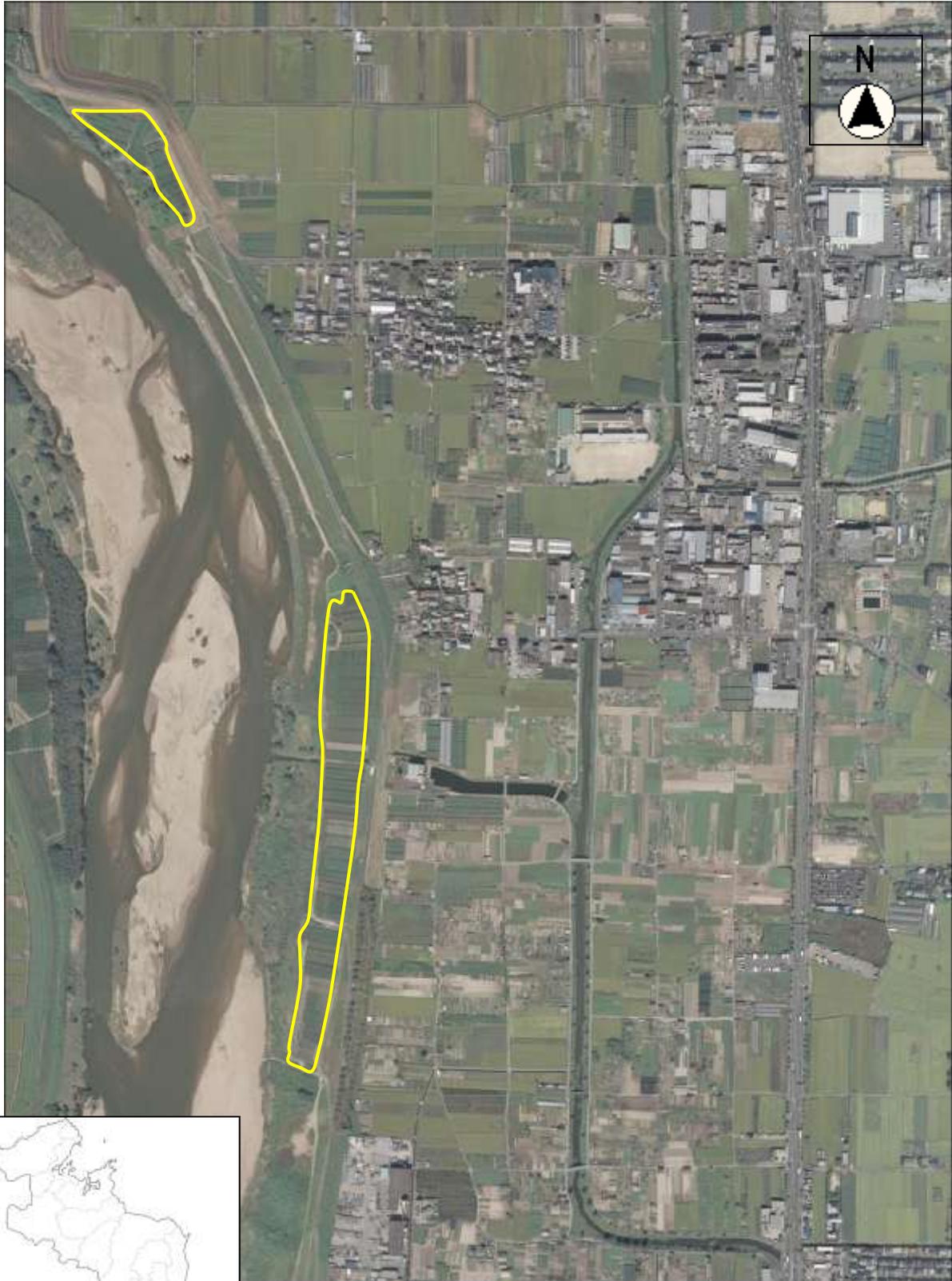
景観資産の名称	浜茶と竹林の景観・城陽市上津屋 ～木津川の恵みがもたらす宇治てん茶～
申請者	城陽市茶生産組合

代表写真



1 位置及び範囲

【位置】 【登録範囲と範囲設定の考え方】・市内のうち木津川沿いに広がる上津屋地区の茶畑（浜茶）を登録範囲とする。



2 自然、歴史、文化等からみた特性

□景観資産の魅力

- 市内の西部を流れる木津川沿いに茶畑が位置し、自然が織りなす木津川の清流と生業がもたらす自然仕立ての茶畑とその上流にある竹林が一体となった調和のとれた景観が広がる。
- 4月下旬になるとあたり一面の茶畑が黒色の寒冷紗や昔ながらの栽培方法である「こも」や「よしず」で覆われた壮観な光景が広がり、高級なてん茶が生産される。また、収穫期には茶摘み子でにぎわい、活気にあふれた雰囲気となる。
- 寒冷紗を用いた覆い下栽培では、日光を遮って栽培することにより、まろやかで旨味の多いてん茶が生産されている。また、「こも」や「よしず」を用いた栽培は、労力や手間はかかるが、遮光率の加減ができ、わらやよしから垂れる栄養分が茶園にとって良く、品評会で上位入賞を果たす最高級なてん茶が生産されている。
- 「こも」は茶農家が田で栽培した稲や付近の農家から購入したわらを編んで作ったものが用いられており、「よしず」は、滋賀県の琵琶湖を中心とした葦を編んだものが利用されている。

(寒冷紗の覆い下園)



(小学生の茶摘み体験)



(本ず茶園での茶摘み風景)



(本ず茶園で摘み取られた茶葉)



□自然的特性

- 山城盆地の中央を南北に流れる木津川沿いの地域は、宇治川流域や東部の中山間地域と並ぶ茶業の好適地であるとされている。木津川の氾濫等によりもたらされた肥沃な沖積砂質土壌に茶園が開けており、品質全般の調和がとれ、特に香りや色合いのすぐれた茶葉を産している。ただし、栽培面では日やけしやすく、土壌の保水力を向上させるため稲わらなど有機物の施用や夏場の被覆を行う必要がある。

(有機物の施用状況 1)



(有機物の施用状況 2)



□歴史・文化的特性

- 市内におけるお茶栽培のはじまりは不明確であるが、資料によるとおそくとも17世紀中期には市域に茶園があったことが分かっている。
また、嘉永6年(1853年)に制作された城江銘茶製所鑑によると市内のほぼ全域で栽培されていたことが分かる。
- 堤外地について、戦前は桑畑が中心であったが、戦後徐々に茶畑が多くなっていった。当初は玉露の生産が主であったが、昭和初期からてん茶へと変わっていった。

□周辺環境との関係

- 河川敷の茶畑と木津川の間には、洪水時の濁流から茶畑の被害を緩和させる竹林がある。昔は、この竹林の竹が、茶棚の設置の材料に使われていたことがあった。
- 堤内地の集落には、昔ながらの茶工場もあり、伝統感が伝わるため可能な限り将来にわたって使用できるように努める。

(竹林の写真 1)



(竹林の写真 2)

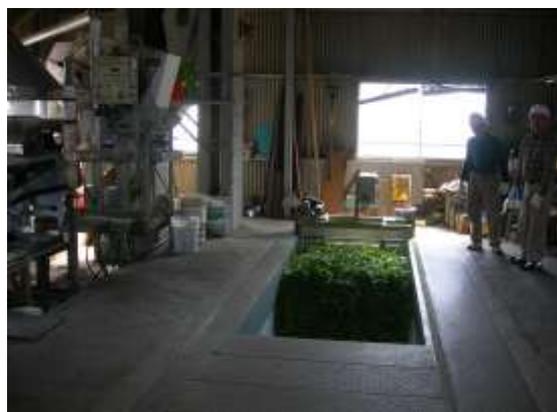


※茶畑と木津川の間には竹林が位置し、上流からの濁流の被害を低減する役目を果たしている。

(堤内地のお茶工場外部 1)



(堤内地のお茶工場内部 2)



3 景観の保存、育成及び創造に関する事項

□法律や条例などによる景観上の規制誘導事項

- 農用地区域（農業振興地域の整備に関する法律）に指定
- 河川区域（河川法）

□景観づくりの目標像

- 木津川沿いに広がる茶畑を残し、木津川の清流と竹林がもたらす浜茶の景観をいつまでも保てるようにする。
- 昔ながらの栽培方法である「こも」や「よしず」を用いた本ず栽培が拡大するようサポートに努める。

□景観づくりの取組

- 茶生産が将来にわたって行われることが重要であり、茶農家への支援、補助を行政と一体となって取り組んでいく。
- 堤外地や川沿いのゴミの清掃、竹林の保存にも心がけていく。
- 摘み取られた茶葉の加工に必要で、圃場に近く堤内地に位置する茶工場についても、付近の景観に調和する工場建設、運営に努めていく。
- また、高級てん茶の消費拡大を図るため、他団体と協力し毎年10月の第3日曜日に富野の荒見神社で城陽茶まつりを開催し、古式に則った茶壺の口切の儀から始め、お茶席、お茶のおいしい入れ方教室、茶そば席等を実施している。文化パーク城陽内にある茶室で抹茶を頂く体験、お茶ができるまでの説明等を行う心とむ抹茶ふれあい体験にも協力し、市民等へ気軽に味わえる抹茶の消費拡大にも努めていく。
- 農薬使用の基準や保管方法、農作業中の事故防止、安定的な農業経営を行う基準を守る宇治茶GAPの取り組みもあり、実施により景観のみならず環境に配慮した茶生産にも努める。

(城陽茶まつりの様子 1)



(城陽茶まつりの様子 2)



(心和む抹茶ふれあい体験の様子 1)



(心和む抹茶ふれあい体験の様子 2)



[現状]

- 燃料費等が高騰する一方茶価は低迷し、茶農家にとって経営は厳しいが、後継者は育っており、経営は引き継がれている。茶農家数自体は減少しているが、後継者のない茶園は規模拡大を目指す地域の茶農家とで賃借されており、面積的な減少はない。

[課題]

- 高級てん茶の需要拡大。
- 老齢茶樹の更新。後継者の育成。
- 安心、安全な宇治茶を生産し、環境に配慮した茶業や農業労働事故防止のため府内統一の基準が設けられた宇治茶GAPの推進
- 周辺の環境に馴染む近代的な茶工場の建設、運営

[解決のためのアイデアや方針]

- 日本のみならず世界の富裕層に高級てん茶のPRを行っていく必要があり、海外戦略を茶業会議所などの団体と共に展開する。
- 優良品種等への改植を推進し、栽培環境の整備を進めていく。
- 宇治茶GAPなどの品質管理と安全性の向上、生産履歴の徹底を進める。
- 高級てん茶の産地「城陽」の名称をPRする。
- 飲んでもらう抹茶だけでなく加工品や和菓子、スイーツへの利用など、食材としての利用も促進していく。

4 景観を活かしたまちづくりへの展開に関する事項

□景観を活かしたまちづくり活動

[現状]

- 上津屋地区における木津川の堤防は、宇治茶の郷づくり協議会が宇治茶歴史街道のルートに指定しており、城陽観光ボランティアガイドクラブによる「木津川の桜つつみと浜茶をめぐるウォーク」などの開催地や、日常的な散歩ルートとしても利用されている。
- 心和む抹茶ふれあい体験、城陽茶まつりの実施などにより、市民等へ市の抹茶の普及、景観のPRを図っている。

[課題]

- 市の抹茶の普及、景観のPR、周知をしていく中で拠点となる施設がなく、また日常的に城陽のてん茶から作られる抹茶を飲める施設がない。
- 上津屋の茶畑（浜茶）を見渡せる木津川堤に、茶の解説看板等がない。

[景観を活かしたまちづくり活動のアイデアや方針]

- 「お茶の京都」の取り組みの一環などで上津屋の茶畑（浜茶）を見渡せる木津川堤に茶の解説看板等を設置し、散歩者等に周知を図っていく。
- 市民や観光客に城陽市の茶に触れてもらうため、日常的に抹茶を味わえる施設を検討する。
- 茶摘み体験などの城陽の茶に触れる取り組みを実施するとともに、城陽のてん茶から作った抹茶「鷺坂の昔」の普及を図る。
- 接待等に用いるなど身近な場所で城陽の抹茶などを勧めるようにしていく。
- 全国茶品評会や関西茶品評会での産地賞受賞、農林水産大臣賞の獲得をめざし、市名の周知、景観のみならず品質の高さをPRしていく。
- 城陽のお茶を活かした加工品やスイーツを作成し、飲むお茶のみならず他分野との協力や農家が主体となった6次産業化を進めていく。
- 一年を通して城陽市に観光客が訪れるよう、寺田いもや梅、イチジク、花き類など、お茶とセットで四季の風景を紹介していく。
- 茶農家のみならずお茶や景観に関心のある市民も含めたお茶に係るワークショップの開催を行政と協力し、開催を検討する。

(鷺坂の昔)



5 その他必要な事項

【城陽市茶生産組合の概要】

- ・設 立 昭和54年 3月31日
- ・構 成 員 24名
- ・役 員 会 長 北口 正
副会長 北澤 喜則
会 計 北本 亮
監 査 村田 恭
- ・設立目的 城陽市で生産される茶生産技術の向上と併せて所得の向上を計り、茶業の振興をはかることを目的とする。

【登録候補資産への行き方】

- ・近鉄京都線久津川駅から徒歩約20分
久津川駅下車後、府道八幡城陽線を西へ木津川方面に直進。
平川のまちなみを抜け、上津屋地区へ。さらに堤防をあがって南側へ。
堤防の上からは、堤外地、堤内地の茶畑も一望でき、特に堤外地につらなる浜茶の
景観と木津川のせせらぎが、心を癒してくれます。